

文化人類学と中川米造先生

波平恵美子

中川米造先生に初めてお目にかかったのがいつのことだったのかまったく記憶にない。いつの間にか、先生はご自分の活動の領域に自然に招き寄せてくださり、その素晴らしいたくさんのお弟子さんやお仲間を引き合わせてくださっていた。もし、先生に出会うことがなかったなら、私はこれほど長い間にわたって、医療を研究の対象とすることはなかったのではないかと思われる。

先生のお名前は、和田移植にかかわるご発言や御著書を通して存じ上げていたが、お目にかかって驚かされたのは、お書きになったものからは想像できないほど穏かで、ソフトで、時には飄々とした雰囲気と、博識とであった。文化人類学は、綿密な調査も必要であるが、雑学によって得る博識が調査や研究分析の際にたいへん役立つ。先生の博覧強記が文化人類学や医療人類学への関心を呼び寄せたのではないかと拝察するのである。

テレビや新聞で、医療批判を盛んになさっておられたころ、「先生、批判という行為はたいへんな精神的ストレスをもたらすと思うのですが、先生はどのようにそれをしのいでおいでなのですか」とお尋ねすると、「いや、僕は遊んでるんですよ」とおっしゃった。もちろん「遊んで

いる」のではない。自由闊達な精神でのみ批判という行為は可能であり、それはストレスをもたらすものではないとおっしゃったのだと理解した。医療という人間存在の内容に直接にかつ多方面にかかわる人間の営為を批判するには、十二分の知識と人間への洞察、そして自由な思考がなければならぬことを身をもって教示してくださったと思う。このあり方は、まさに文化人類学という領域の根幹であり、先生は実に「文化人類学的」研究者でもおありだったと思うとき、私にとって失ったものの大きさに今さらながら呆然となるのである。

(お茶の水女子大学)

中川米造先生を偲んで

長谷川 浩

中川米造先生ご逝去の知らせは、驚きと悲しみの一語に尽きるものでした。日本保健医療行動科学会の理事会で一緒に折りに「がんの手術をしたよ」と淡々と語っておられましたが、お忙しいスケジュールを縫って東京まで来られる様子は、いつもの先生と変わるところがなく、中川流に病を克服しておられるのだと思っておりました。一時休養なされば、再びお目にかかれるものと、疑いもなく信じていましたので、本当に残念です。

中川先生とは、日本保健医療行動科学

会設立の当初からご一緒させていただきました。この10年余、理事会や大会でたびたびお目にかかり、講演・シンポジウム・ワークショップそして懇親会などの雑談を通じて、たくさんの方のことを教えていただきました。もちろん、先生には教えるというお気持ちはなかったでしょう。でも、話の中身だけではなく、その根底を流れるヒューマンなセンスと思想、飄々とした生き方・行動が、いつも大事なものを気づかせてくださったと思います。

「人間の自由とは何か」という仰々しい哲学的命題も、先生の存在そのものとして明示しておられたように思います。先生は、巧まずしてまわりの人々の気持ちを解きほぐし、勇気を起こさせ、「何とかかなるぞ」という安心感を育まれました。博学で常に新しいものを目指しておられた先生は対話の達人でもあり、「わしは知らんから好きなようにやって」と言われると、何か気が楽になって可能性が開ける思いでした。

日本保健医療行動科学会にとって、中川先生はかけがえのないお方でした。多様な専門領域の人々が志を共にして集い、いろいろなワークショップを企画したり、小規模の学会ながらも国際会議を開くことができたのも、一本筋の通った中川先生の存在があればこそという思いを痛感しています。

おそらく、中川先生は「まあ、好きなようにやって」と言いながら、私たちを

見守っておられることでしょう。先生が生涯をかけて追い求めた夢を、私たちの学会が少しでも実現できるようにしたいと思います。

中川先生、本当に有り難うございました。

合 掌
(東海大学)

中川先生の近くで

松山 圭子

1997年8月23日の午後、私は中川先生の病室にいた。その日の朝、先生入院を知らせる電話が入ったのである。先生は私の顔を見て「来てくれて、50%だけ嬉しい。」先客の帰ったあと昼寝をしようとした矢先、私が邪魔をしたので、50%は迷惑だというのだ。

しかし、病室では話が弾んだ。やっと出版されたNさん監訳の本の話になり、「あの中の中のいちばんおもしろい章、書いてるのはキャスリン・ハンターなんですよ。ね、*Doctor's Story* の。先生『医療の原点』で書いてはった。」「あれは～いい本。…あんた何で知ったんや?」「ニューイングランドジャーナルの書評で見て、おもしろそうやったんで。先生は何で?」「あれはなあ最初、雑誌に連載しとったんや。そのときからずっと読んでた。」「誰か翻訳してくれへんかなあ。医者語り、と

か。「かたりねえ。」「あきませんか？ クラインマンの『病の語り』も出たことやし。」「かたり，いうのは悪い意味もあるからなあ。」それは「騙り」を指していた。先生は「あれは〜いい本だ」と繰り返した。

中川先生によれば「昔，ある所に1人の男が…」という物語や小説と同じく，1人の人間について語ることが医療の原点なのだ。ワイワイと皆で読んだ先生の最初の単著『医学の弁明』（1965年，誠信書房）は，「病的存在」の章がトルストイの小説『イワン・イリッチの死』で始まり，「医師」の章がウェリサーエフの小説『医師の告白』で始まっている。

阪大医修士課程に学びはしたが，中川研究室で修士論文を書かなかった私が，先生に親しく教を乞うた，というより先生の近くで過ごせた（先生は「教える」人ではなかった）のは，先生や中川研の教室員が形にこだわらなかったからであろう。1986年2月から88年6月まで週に3日，中川先生の秘書を務めさせていただいたことで，私は中川研の教室員になった。

いちおう秘書だったから，講演や授業のための準備にはお付き合いした。「老女と若い娘」やフィッシャーの階段といったすぐには書けないだまし絵以外は，いつも直前に手書きのOHPシートを用意された。整理整頓して残しておくより，書きながらそのつど，考えをまとめるのがいいというのだった。私のほうは，ゲーム用の簡単な色紙細工や「月でのサバ

イバル」シートを用意した。様々なツールが先生の周囲にあふれていた。

非常勤先のセミナーを準備する今，中川先生の手法を知らず知らず体得していたことに気づく。「医学報道と医学啓蒙の構造」という，従来の〇〇学の枠からはみ出した論文を書いて学位を取得した今，10年前，このテーマにつながる医薬品広告を扱った論文らしきものを書き始めたときも，最初に見せたのは中川先生だったなあ，と振り返っている。

あの日，病室を出ようとする時，「さっきは50%と言ったけど，訂正。60%嬉しい」と少し早口で言われた。そのときにはかんだような表情と声が，よみがえる。私の思い出のなかに生き続ける中川先生に，今も励まされている気がして，授業の準備をし，パソコンのキーボードを叩くのである。

（日本保健医療行動科学会奨励研究員）

開示悟入の師，中川米造先生

村岡 潔

中川米造先生と初めてお会いしたのは1986年の2月だった。阪大医学部がまだ市内の中之島にあった頃である。その日は大学院の入試日で，私は，口頭試問のために旧蛋白研にあった先生の研究室を訪ねた。緊張の面持ちで入室すると，先生は，開口一番，あなたの手紙は読みま

したよと告げ、直接的な指導はしないがよろしいかと尋ねられた。大学院は自主勉強の場と理解し、私は、はいと即答した。口頭試問はそれで終わり、先生は、私ともう1人を連れて近くの『徐園』で名物の三鮮麺を昼食にごちそうしてくれた。

先生は多忙で、講演にワークショップにと東奔西走される日々であった。中川研究室では、先生が比較的大学におられる木曜日に、院生たちを中心に自主講座的な疾病論研究会がもたれていた。先生の臨席はまれだったが、よく会をのぞいては学生の質問に答えてくれた。研究室は先生を慕っていろいろな人が出入りしていたが、梁山泊さながら来るものは拒まず去るものは追わずという自由闊達な気風があった。私は、彼らから間接的に中川先生の思想を学んだ。疾病論研究会は、その後、医療人類学研究会や中川フォーラムなどに変わったが、先生の阪大退官後も医療文化研究センターの研究会として命脈を保っている。

先生は、私の不勉強を気づかい、折りあるごとに禅問答のような形で示唆を与え続けてくださった。医療思想史に興味があるといえば、鍵は19世紀だとおっしゃり、保健医療行動科学会に発表するというとデータはありますかと念を押される。看護学校の医学概論の口を世話してもらったときも、先生の本を教科書にといたら、テキストは使わんほうがよいと忠告される。告知は「You are が

ン！」と直截に言ってすまずことではないし、肝臓癌のネズミは人と違って病気を意識しないから走り回れるとユーモアに説く。法華経にある《開示悟入》*という気づきと癒しの鍵言葉を教えてもらったのもこの頃であった。

中川研では毎年、太地、湖北など関西近縁を先生と一緒に合宿旅行をした。昨年2月には先生と私たちは台湾に旅行し3日間ホスピスを見学した。その時、ご自身の病気のことには触れず、癌の人々の語りに親しく耳を傾けていた姿が印象的だった。6月の本学会では先生の小集団技法のワークショップに参加した。病いを得ても平生と変わらず、皆さんの前で話をする元気があると笑顔で司会進行をなさっていた。昨年9月に病床を見舞った折り、痛いことはないが本が読めないのがつまらんとおっしゃったことが心に残った。

11月になって、私は先生が1950年代に書いた眩暈解析に関する論文を読み、すでにそこに先生の学問に対する基本姿勢が示されていることに気づいた。知恵は態度の結果なのであった。私は、11年目にしようやく先生の学問の世界を垣間見ることができたのである。

【注】*中川米造『学問の生命』佼成出版社、1991年、pp.86-87。先生の自伝的学問論。

(佛教大学・医学概論)

中川先生が残してくださったもの

森本 彌生

1997年9月8日、中川先生から職場へ電話がありました。「森本さん、僕もうぼつぼつターミナル期なので家に帰りたいと思っているんや。12日に寝台車を頼んでいるので病院から家まで一緒に乗ってほしい。それでIVHのボトルの交換を家内に教えてほしいんや。」か細い声で聞きとりにくく、またあまりに突然のことでしたので、私自身がとても動揺しているのがわかりました。「先生、奥さんいらっしゃいますか。奥さんをお願いします。」やっとの思いでそれだけ伝え、詳細については奥様から経過をお聞きしました。12日は泊まれる準備をして病院へうかがいました。病室へ入って先生と奥様にお会いしたとき、先生が私を呼ばれたのは、家族、特に奥様への心配りからなのではないかなあということを強く感じました。

病院から自宅までの寝台車は1時間半くらいかかり、元気な者が座位の状態に乗るのに、そう苦痛は感じませんが、いわば足付タンカ上での仰臥位は、車の振動が体全体に伝わり、とても疲れるご様子でした。それでも点滴ボトルをじっと持っている私に、「手が疲れるでしょう」と何度も声をかけてくださいました。夜は移動の疲れもあり、体温が上昇し、心

配なので先生の側で一夜を過ごしました。奥様へは今までの病院での疲れを少しでもとっていただきたく休んでもらうことにしました。そうすることが先生への看護でもあるように私には思われました。家族の方が夜のシフトを組まれ、私もその1人に加えていただきました。先生は一貫して医療の主体は患者にあるということを私たちに教えてくださったと思います。ご自身の身体においては、多くの方々の心配をよそに治療をみずから選択されてこられたように思います。家へ帰られてから私たち（看取る者）にご自分のほうから要求されることはありませんでした。先生の視線や、手・足の動きをこちらが察知して、看取るだけでした。意識がなくなられるまで、常に側にいる者への気配りをなさってました。

看取った者として、先生に安らかな死を受け入れてもらえたのかどうかはわかりません。先生が私たちに残してくださった多くの教えを、それぞれの立場で生かしていくことが残された者の使命だと思いますので、私も今後この思いで教育にあたりたいと思います。

(洛和会京都看護学校)

中川米造先生著訳書

- 1 中川米造：医学の弁明，誠信書房，1964.
- 2 中川米造：日本科学技術体系25巻（分担執筆），第一法規出版，1967.
- 3 中川米造：日本科学技術体系25巻（分担執筆），第一法規出版，1968.
- 4 中川米造他：世界の医学教育（アメリカ，スウェーデン），医歯薬出版，1969.
- 5 中川米造：医学を見る眼，日本放送出版，1970.
- 6 中川米造（共訳）：医学歯学教育改革の指針：カーネギー委員会レポート，医歯薬出版，1971.
- 7 川上武，中川米造（編）：講座・現代の医療 2，日本評論社，1972.
- 8 川上武，中川米造（編）：講座・現代の医療 4，日本評論社，1972.
- 9 川上武，中川米造（編）：講座・現代の医療 3，日本評論社，1973.
- 10 川上武，中川米造（編）：講座・現代の医療 5，日本評論社，1973.
- 11 中川米造：医学は人を救っているか，朝日新聞社，1973.
- 12 中川米造訳：I. ガルドストーン著：社会医学の意味，法政大学出版局，1973.
- 13 中川米造：医療的認識の探究，医療図書出版，1974.
- 14 中川米造：医療行為の倫理，医療図書出版，1974.
- 15 中川米造訳：ゴルドン・E・モス著：病気と免疫の社会学，紀伊国屋書店，1974.
- 16 中川米造訳：L. ゴールドマン著：医師が意見を異にすると，時事通信社，1975.
- 17 中川米造：健康の思想，潮出版社，1976.
- 18 中川米造：医の倫理，玉川大学出版部，1977.
- 19 吉利和，中川米造：新医学序説，篠原出版，1977.
- 20 中川米造：医学教育白書（共著），篠原出版，1978.
- 21 中川米造：笑い泣く性—文化生理学コースリー，玉川大学出版部，1979.
- 22 中川米造，星新一：手当ての航跡—医学史講義，朝日出版社，1980.
- 23 中川米造：医学・医療をどう学ぶか（共著），汐文社，1980.
- 24 中川米造：医学教育マニュアル 3 教授—学習方法（共著），篠原出版，1982.
- 25 中川米造：医とからだの文化誌，法政大学出版局，1983.

- 26 中川米造：医学とのつきあい方，人文書院，1983.
- 27 中川米造（編）：21世紀医療への対話，教育広報社，1983.
- 28 Yonezo Nakagawa：History of Medical Education（共著），Taniguti Foundation, Osaka, 1983.
- 29 中川米造：環境医学への道，日本評論社，1984.
- 30 中川米造，他監訳：F. M. Katz, T. Fulop 編：医学教育と地域保健計画，篠原出版，1984.
- 31 中川米造，村上陽一郎共監訳：マルセル・サンドライユ他著：病の文化史，リポート，1984.
- 32 中川米造：医学教育（共著），中央法規出版，1985.
- 33 中川米造：医療と人権（共著），中央法規出版，1985.
- 34 岡国臣，中川米造監訳：F. B. ニュートン，K. L. エンダー編：大学の学生指導：成長モデルの理論と実践，玉川大学出版部，1986.
- 35 中川米造：医の倫理（共著），東京大学出版会，1987.
- 36 中川米造：サービスとしての医療—医療のパラダイム転換，農文協，1987.
- 37 中川米造監訳：G. M. フォスター，B. G. アンダーソン著：医療人類学，リポート，1987.
- 38 中川米造：医療の文明史，日本放送出版協会，1988.
- 39 中川米造：医療・医学研究における倫理の諸問題（共著），東京医学社，1988.
- 40 中川米造：＜癒し＞のまなざし—中川米造対談集，福村出版社，1989.
- 41 中川米造（編）：病の視座—メディカル・ヒューマニティーズに向けて，メヂカ出版，1989.
- 42 中川米造，宗像恒次（編）：医療・健康心理学，福村出版，1989.
- 43 中川米造：日本の医学教育（共著），篠原出版，1989.
- 44 中川米造訳：マーガレット・ロック著：都市文化と東洋医学，思文閣出版，1990.
- 45 中川米造：学問の生命—「医学とは何か」を問い続け行動する，佼成出版社，1991.
- 46 中川米造（編）：哲学と医療，弘文堂，1992.
- 47 中川米造監訳：D. Newble, R. Cannon 著：医学，歯学，看護学を教える人のためのメディカルディーチャー・ハンドブック，西村書店，1992.

- 48 中川米造訳：クレール・アンブロセリ著：医の倫理，白水社，1993.
- 49 中川米造：素顔の医者―曲がり角の医療を考える，講談社，1993.
- 50 中川米造，藤崎和彦（編）：良い医者育てる―21世紀の医療を担う，至文堂，1993.
- 51 中川米造：医療の考え方，亀岡市教育委員会，1993.
- 52 中川米造：医学教育技法マニュアル（共著），篠原出版，1993.
- 53 中川米造：医療のクリニック：＜癒しの医療＞のために，新曜社，1994.
- 54 中川米造：臨床教育マニュアル（共著），篠原出版，1994.
- 55 中川米造：医療のタテマエとホンネ，かもがわ出版，1994.
- 56 中川米造，小林昌広：「医の知」の対話―癒しをめぐる，人文書院，1995.
- 57 中川米造：医療の原点，岩波書店，1996.
- 58 中川米造：医学の不確実性，日本評論社，1996.
- 59 中川米造：病と医療の社会学（岩波講座現代社会学14），岩波書店，1996.
- 60 中川米造，中川晶：ちょっとおしゃべりココロの健康からだの医学―からだの文化生理学，フォーラム・A，1996.